6　田辺を特色づける生きもの

①　植物

マツバラン：最も原始的なシダ植物の一種です。和歌山県では田辺市より北ではきわめて少なくなっています。田辺地方は江戸時代からの名産地で、いくつもの古典園芸の品種も産出しています。採取と環境変化のため近年激減しました。

マツバラン

キクシノブ：シノブに似たシダで、やや小型、葉は常緑で肉厚く硬いのが特徴です。暖地性の植物で数が少なく、岩壁に小さな群落をつくります。南方熊楠が大切にしていたものです。

キクシノブ

ツルデンダ：山地の湿った岩壁に着生するシダです。奇絶峡の道路沿いの岩壁に今も小さな群落があります。（写真は 39 ページを参照）

オリヅルシダ

オリヅルシダ：一見オニヤブソテツに似ていますが、葉の先端が土にふれると根を出してふえます。和歌山県下の産地は田辺と大島だけで、高尾山に自生地があります。

シンテンウラボシ：ヤリノホクリハランとイワヒトデ類との自然交配種といわれている珍しい植物です。中芳養に北限の大群落があり、田辺市が天然記念物

シンテンウラボシ
（ヒトツバイワヒトデ）

に指定しています。

ヒメコマツ：“五葉松”として知られる木です。県下では主要な山間部の岩尾根に生育していますが、かつては三星山一帯に生えていたものらしく、現在も山頂部にわずかに生育しています。

食虫植物：田辺から白浜にかけての一帯は、和歌山県下最大の多産地でした。モウセンゴケ、コモウセンゴケ、イシモチソウ、ホザキノミミカキグサが、主として日当たりのよい水湿地や湿った裸岩に生え、タヌキモ類は水中生活です。最近はコモウセンゴケ類以外はほとんど見られなくなってしまいました。（写真は 35・36 ページを参照）

イチイガシ

イチイガシ：遺跡から出土するので、昔は丘陵地や山すそに森林をつくっていたと考えられますが、現在の田辺では中芳養の八幡神社に大木が残っています。

ミスミソウ

ミスミソウ：寒冷地の森林に生える常緑の草です。和歌山県下では、高野山周辺からわずかに記録があるだけの少ない種で、早春に可憐な花をつけます。花色は白色から紺、淡い紅、紫までいろいろです。

シマサルナシ：別名ナシカズラ、キウイフルーツに似たつる植物です。紀南地方では海岸線に多いのですが、田辺では上秋津の左向谷や奇絶峡などの山間部に生えています。

シマサルナシ

カキノハグサ：葉はカキの葉に似て大きく、初夏に黄色の花を数個つけます。和歌山県下では、紀北の山地に多く見られる植物で、田辺市では槇山の中腹などに生えています。昭和初期に秋津川から変種としてナガバカキノハグサが記録されました。

カキノハグサ

ナンキンナナカマド：山地から亜高山の植物として有名なナナカマドの仲間です。初夏に白い花をつけ秋には赤い実をつけます。紀南では海岸近くにも生育し、田辺市では新庄や天神崎にも生えています。

ナンキンナナカマド

キイセンニンソウ：センニンソウに似ていますが、葉は厚くて革質（かくしつ）、葉柄（ようへい）に節があるという特徴をもっています。紀伊半島以南に分布し、和歌山県下では日高郡以南に見られ、田辺では山間部に多産します。（写真は 18 ページを参照）

ハカマカズラ：亜熱帯に分布するつる植物です。別名をワンジュ（彎珠）といい、古くからその種子を数珠（じゅず）の材料にしてきました。田辺湾の神島はこれが多数生育していることで、全国に知られています。市内の各地にも植栽されています。先に切れ込みのあるその葉の形をはかま（袴）に見立ててこの名がついています。

ハカマカズラ（幹）

ハカマカズラ（葉と花）

ハカマカズラ（実）

アサマリンドウ：リンドウとちがって、葉が厚く緑が濃い上につやがあります。紀伊半島と四国だけに分布する植物です。名前の「アサマ」は、伊勢の朝熊（あさま）山に由来するものです。朝夕霧のかかる環境に生えるのですが、紀南地方では新庄のような海岸近いところでもたくさん見られます。

アサマリンドウ

カギカズラ：暖地性の大形のつる植物です。葉腋に大きく曲がったカギがあり、このカギをまわりの樹木にひっかけて這い上がります。植林地によくはえ太くなるので、木をいためるといって嫌われることもあります。葉にはこの植物独特の光沢（こうたく）があります。紀南地方では普通種ですが、全国的にはたいへん少ない植物です。

カギカズラ

タイキンギク：きわめて大形の野菊です。背が高く伸びて２ｍ以上にもなり、晩秋から初冬にかけて黄色の小花を咲かせます。亜熱帯に分布し、紀伊半島では海岸線に点々と生育していいます。

タイキンギク

キイジョウロウホトトギス：湿った岩壁から垂れ下って生育する植物で、紀伊半島の特産種です。紀南地方に広く分布しているのですが、秋に黄色の美花をつけるので有名となり、各地で採取

キイジョウロウホトトギス

されて少なくなってしまいました。

ギボウシの一種：崖から垂れ下って群落をつくるギボウシが、ひき岩群や龍神山でよく見られます。ヒュウガギボウシの一種とみなされていますが、今のところはっきりわかっていません。

ハルザキヤツシロラン：深い照葉樹林に生える腐生植物です。５月～６月に咲く褐色の花は高さが数㎝しかなく、落ち葉のすき間からわずかに花をのぞかせる程度です。結実後は 30㎝あまりにも伸びるので、見つかるのはこの時期です。南方熊楠が研究したきわめて不思議な植物です。秋に開花する別種アキザキヤツシロラン、クロヤツシロランもあります。

タシロラン：全体が白色の腐生植物で、たくさんの花を茎につけます。最近になってあちこちの林緑や果樹園で多量に発生しているのが見つかりました。

ミスミイ：古くから少ない植物だったようで、南方熊楠の時代に新庄付近で発見されて有名になりました。その後なくなったと思われていましたが、少しだけ今も生き残っていることがわかりました。カヤツリグサの仲間で、細い緑色の棒状の草です。同じ仲間によく

ハルザキヤツシロラン

クロヤツシロラン

タシロラン

似たものがいくつかあって区別するのは難しいものです。

キノクニスゲ：西南日本の深い照葉樹林の樹下に生える大形のカヤツリグサの仲間で、暖地にしか見られないきわめて少ない植物です。田辺市では神島に大群落があり、和歌山県下では他には由良町衣奈（えな）の黒島、南部の鹿島（かしま）、串本の大島、古座の九龍島（くろしま）に生えているだけです。こんなに珍しい植物ですが、生えている状態は“ただの草”にしか見えません。

キキョウラン：ランの葉に似た暖地性のユリ科の植物です。和歌山県下では海岸線に沿って点々と生えていて、田辺ではやや内陸側の岩上に生えています。

ヒメコウホネ：全国的に少ないといわれている水草です。田辺にはまだ数ヶ所の自生地がありますが、埋立てや水の汚濁（おだく）で減少しつつあるのが現状です。

ミヤマトベラ：海岸にたくさん生えているトベラと違って、山間の照葉樹林に生えるマメ科の植物です。

ハマボウ：海岸の湿地に生えるハイビスカスの仲間の樹木で、夏に大きい黄色の花をつけます。日高川河口に大群落があり、昔は田辺湾の南岸に多く自生

キノクニスゲ

キキョウラン

ヒメコウホネ

ミヤマトベラ

ハマボウ

していましたが、海岸線の埋立てによって、現在はほとんどなくなりました。新庄町の内之浦干潟親水公園には植栽されたものが見られます。

ムラサキセンブリ：日当たりのよい草地に生える目立たない草です。近年各地で激減した植物ですが、新庄付近を中心にわずかに生き残っています。大切に保全したいものです。

ムラサキセンブリ

キジョラン：暖地性の大形のつる植物で、広くてつやのあるハート形の葉をつけます。和歌山県北部ではきわめて少ないのですが、紀南地方では数は少ないものの、かなり広い範囲に生育しています。

キジョラン

シバナ：海水の入る川口（汽水域）や沼地（塩沼地）に生える植物で、海水に浸っても生きていけるように、葉は特に細長くて分厚くなっています。南方熊楠は、この植物に特に強い関心を持っていたらしく、たくさんの標本を残しています。おそらく、そのころには県下一円の海岸に点々と自生地があったようです。ところが、海岸線の護岸工事と入り江や塩沼地の埋立てなどで、ほとんど絶滅したような状態になりました。ところが新庄付近で細々とわずかに生き残っていて、最近になって写真のような群落に回復しています。

シバナ

②　昆虫〔特に注目される昆虫〕

クチキコオロギ：亜熱帯以南に分布する大形のコオロギです。体は大きく触角がきわめて長く、ハネが短いのが特徴です。そのため、腹部の半分以上が翅（はね）におおわれていません。タイワンエンマコオロギも芳養海岸から知られており、この地域が北限だと考えられています。幼虫で冬を越し、初夏成虫になります。

クチキコオロギ

ムカシトンボ：日本とヒマラヤ地方にだけすんでいる生きている化石と呼ばれるトンボです。成虫は春に発生しますが、幼虫は冷たい清流で６～７年間も水中生活をするため、川が不安定になると生活できません。そのため、全国的に少なくなり、環境省はすぐれた環境を判断する昆虫（指標昆虫）に指定しています。紀南地方では、山地渓流に生息します。成虫の飛び方はたいへんすばやいです。

ムカシトンボ（幼虫）

ムカシヤンマ：ムカシトンボと同様に珍しく、生きている化石といわれています。幼虫は滝や湿岩に生えたコケ植物の中などで生活しています。成虫は初夏に発生し、日当たりのよい谷間の岩などによくとまります。

ムカシヤンマ

タイワンウチワヤンマ：熱帯系のトンボで、最近北の方に分布が広がっています。腹部の先端にウチワ状のひらひらがあるのが特徴です。

タイワンウチワヤンマ

ヨツボシトンボ：中形のトンボで、体が茶褐色で前後翅に黒褐色の斑紋があります。北日本に多く、南日本では生息地が限られているといわれています。浅い池沼で初夏に発生します。

ヒメアカネ：アカネの仲間は全般に小型ですが、本種は特に小さいトンボです。寒冷地に分布し北日本に多いのですが、田辺や白浜付近には多くの生息地があります。

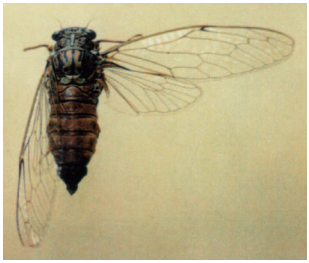
ハルゼミ：アカマツ林の減少のため近年全国的に激減した里山の代表的な昆虫です。マツゼミともよばれ、4月から5月にかけて出現する小形のセミです。紀南地方では浅いシイ・カシ萌芽林やウバメガシ萌芽林にも生息しています。

ヒメハルゼミ：照葉樹林の珍しいセミとして全国的に有名ですが、山間部で初夏に大発生します。

ゲンジボタル：5月～6月に発生する渓流性のホタル。かつては、全国的に広く分布し、各地で多数見られましたが、農薬汚染のため激減し、和歌山県下でも多くの地域で見られなくなりました。紀南地方では、今でも見ることができます。やや小型のヘイケボタルは、水田や溝から発生し、ヒメボタルは陸生で森の中で発生します。それぞれ光の色合いや光り方が少しずつ違います。

ヨツボシトンボ

ハルゼミ


ヒメハルゼミ

ゲンジボタル（幼虫）

ルリセンチコガネ：全国的に広く分布するオオセンチコガネは地域によって変異があり、紀伊半島のものは全身瑠璃（るり）色で、緑色の金属光沢があり、ルリセンチコガネと呼ばれます。大形哺乳類の糞（ふん）を食べるため、シカなどの生息範囲で見られます。同属のセンチコガネは少し小さくて、体色は黒くて光沢があります。このように、動物の糞を食べる虫を“糞虫（ふんちゅう）”と呼びます。

ルリセンチコガネ

ゴホンダイコクコガネ：前種と同じく“糞虫”で、オスに５本の鋭い角があります。一般に山地性の昆虫ですが、紀北地方に少なく紀南地方に多い傾向があります。

ゴホンダイコクコガネ

オキナワコアオハナムグリ：亜熱帯系の小形コガネムシです。日本本土ではたいへん少なく、紀伊半島の南部海岸線が北限です。コアオハナムグリに混じっていますが、前翅の斑紋が小さいこと、腹部が銅色をしていることなどで区別します。

オキナワコアオハナムグリ

イシガケチョウ：熱帯系のチョウです。紀南地方には多産し、山間部の渓流沿いでたくさん発生しますが、市街地でも少なくありません。幼虫は木陰や水辺のイヌビワやイタビカズラの葉を食べ、４月始めから観察できます。幼虫には頭と背に４本の角があり、形も模様も特異です。同じ熱帯系のチョウにスミナガシがあります。暖地性のヤマ

イシガケチョウ

ビワを食餌植物として発生します。幼虫にはやはり角があります。

ヤクシマルリシジミ：紀伊半島を北限とする亜熱帯以南に分布する小さなチョウです。和歌山県下では海岸線に沿って紀北地方まで知られ、紀南地方ではやや普通に見られます。サツマシジミも亜熱帯以南に分布するチョウで、青地のハネに青白色の模様が特徴です。春から発生しますが、秋に増加する傾向があります。

ハマオモトヨトウ：ハマオモト（ハマユウ）は海岸に自生していますが、人家の庭にも多く植栽されています。これを毎年のように食い荒らすイモムシが本種です。別にアカマダラヨトウというガもあり、稀に大発生してハマオモトを食い荒らします。ともに紀伊半島を北限とする熱帯系のガです。

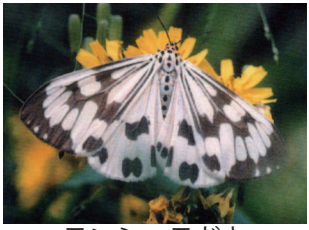
モンシロモドキ：モンシロチョウによく似た昼間に飛ぶガで、東南アジアに広く分布しています。30年ほど前は、和歌山県下ではほとんど記録がありませんでしたが、最近はよく見つかるようになり、幼虫も発見されています。

オキナワルリチラシ：全国的に数が少なく、とても美しいガとして有名ですが、紀伊半島ではそれほど少ないものではなく、山間部では、夏から秋にかけて毎年見つかって

サツマシジミ

ハマオモトヨトウ

ハマオモトヨトウ（幼虫）


モンシロモドキ

オキナワルリチラシ

います。豊かな自然林の残っている地域にすみ、幼虫はツバキ類の葉を食べます。

サツマニシキ：美しいガで、幼虫はヤマモガシの葉を食べ、年に２回（６月・10月）発生します。これらのガは昼間も活動しますが、夜間に灯火へも飛んで来ます。つかむと背中から淡褐色の泡を出します。有害ですから触ったら必ず手を洗うことが大切です。

クロシオキシタバ：比較的近年知られた大形のガで全国的に少ないものとされています。しかし、このガの幼虫はウバメガシの葉を食べるため、和歌山県下には発生地は多く、農薬の影響が少ない山間部の尾根や海岸のウバメガシ林から、毎年たくさん発生しています。同じ仲間のウスイロキシタバ、アミメキシタバ、コガタキシタバなどの種類も知られています。

ツマアカベッコウバチ：クモや昆虫を捕らえて巣に引込み幼虫の餌にする“狩り蜂”です。“狩り蜂”には多くの種類がありますが、体が大きくて腹部の先端が赤いので、すぐにわかります。熱帯系のハチで、和歌山県下の海岸部から知られ、人家周辺にすみつき、大きいクモを毒針で麻痺（まひ）させて引きずっているのがよく観察されます。

サツマニシキ

サツマニシキ（幼虫）

クロシオキシタバ

ウスイロキシタバ

ツマアカベッコウバチ